



Newsletter

No. 19 September 30 2015

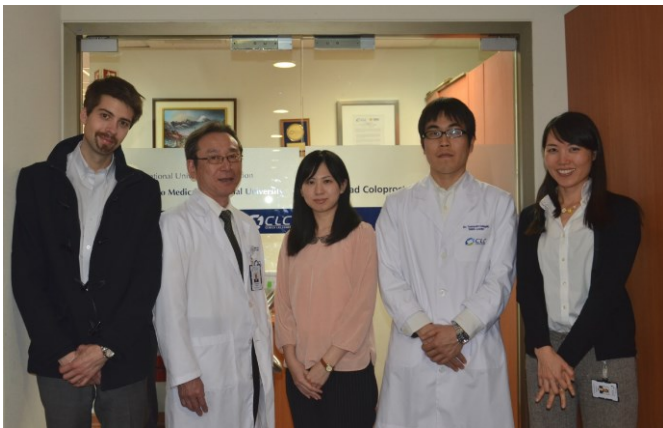
東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

春の訪れ～出会いと別れ～

日本は蒸し暑い夏が終わり、徐々に肌寒くなってきた頃かと思います。一方、地球の裏側に位置するチリでは冬が終わり、徐々にですが暖かく過ごしやすい季節となってきました。特にサンチアゴでは冬の間はスモッグに悩まされましたが、春の訪れとともに、春一番なのでしょうか、風がスモッグを一掃し、清々しい空が広がるようになってきました。街中の至る所に新芽や花々が見られるようになり、特にアーモンドやシルエラの花は、バラ科サクラ属ということもあって、日本の桜に非常によく似ており日本人に春の到来を感じさせてくれます。

日本では、年度を跨ぐということもあり、春は出会いと別れの季節でもあります。LACRCに於きましても、9月から事務の山中結衣係員が3ヶ月の研修のため来智し、そして、10月初旬に椿昌裕教授が1年間のLACRC勤務を終え帰国となりました。椿昌裕教授は、PRENECでの臨床面の活動のみならず、5年目を迎えたLACRCでの日本人医師の在り方、JDP開始へ向けての日本とチリとの連携など、環境整備や交渉の面においても御尽力頂きました。LACRC一同を代表し、椿昌裕教授に感謝の念を込めつつ、巻頭文を締めさせていただきます。

小田 柿 智之 LACRC 消化器病態学分野



左よりウレホラ氏、椿教授、山中係員、小田柿助教、早川氏
(チリの“桜”、アーモンドとシルエラの花とともに)



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
活動報告	4
Staff	8

PRENECの進捗状況

LACRCのメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。このプロジェクトでは、現在第5州バルパライソ、第12州プンタ・アレナス、首都州サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行中です。

プンタ・アレナスにおけるPRENEC三周年記念式典

2012年に開始されたプンタ・アレナスにおけるPRENECが三周年を迎えたことから本年7月に記念式典が行われました。式典では記念行事として椿教授より「日本の地域病院における大腸癌検診の実績」、小田柿助教より「日本における大腸ESD治療」の発表が行われました。

また、この式典に先行し、椿教授が数日前から現地入りし、現地病院では対応困難な症例の大腸内視鏡検査・治療の実践・技術指導が行われました。



左よりカロロビッチ医師、ロペス医師、椿教授、小田柿助教



マガジャネス病院のスタッフと記念撮影



椿教授による技術指導の様子



式典での講演の様子

バルディビア市における講習会

バルディビアはチリ南部ロス・リオス州（第14州）に位置した人口約14万人の都市です。1850年代以降に入植者を受け入れた背景から街や建物よりドイツ文化を感じられます。

7月3日、バルディビア市バセ・バルディビア病院においてPRENECに関する講習会が行われました。LACRCより小田柿助教が参加し「日本における大腸ESD治療」に関する発表を行いました。新たな候補地としてPRENECへの参加が期待されます。



バルディビア市で有名なカジェカジェ川



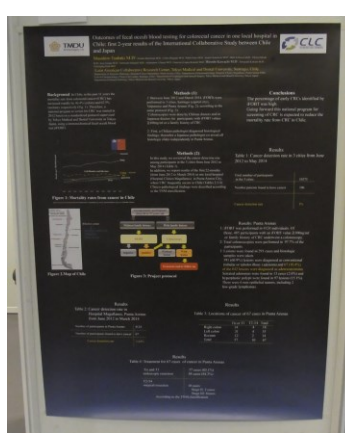
左より小田柿助教、ソト保健省副大臣補佐官、ロベス医師、アベンダニョ医師

17th World Congress on Gastrointestinal Cancer にて発表

スペイン・バルセロナで本年7月1日から4日まで開催された17th World Congress on Gastrointestinal Cancerにて椿教授がPRENECに関するポスター発表「The outcomes of the fecal occult blood testing for colorectal cancer in one local hospital in Chile: results of a first two-year international collaborative study between Chile and Japan」を行いました。



バルセロナ市の街並



学会におけるポスター発表の様子



第三国研修

本年8月17日より5日間にわたりJICA・AGCI（チリ国際協力庁）共催にて第三国研修が開催されました。この取り組みは本学とチリ保健省、CLCの間で進められてきたPRENECをさらに南米の支援が必要とされる国へ普及させるという計画です。今年が第1回目の開催となり、エクアドル、コロンビアからの各医療チームが研修国として参加しました。LACRCスタッフの他に、横浜市立みなと赤十字病院病理部長である熊谷二郎医師、本学の伊藤崇助教がJICA専門家として招聘され、CLC、サン・ボルハ病院内にて多岐にわたる指導にあたりました。開講式では日本・チリ双方の政府関係者にご出席いただき、本学の取り組みの重要性を強調されました。



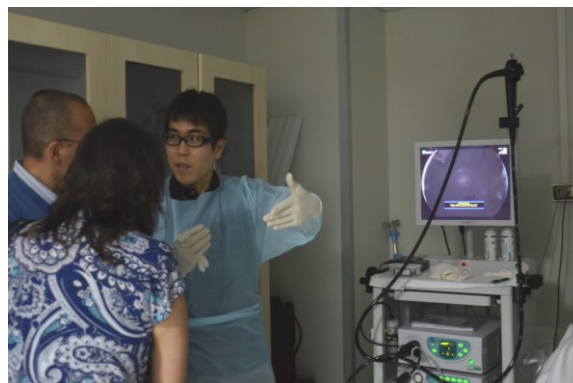
熊谷病理部長による講義の様子



伊藤助教の講義風景



ディスカッション時の権教授



小田柿助教による技術指導の様子



サン・ボルハ病院の施設見学



研修参加者との記念撮影

LACRC活動報告

日智商工会議所における邦人向け講演会

日智商工会議所は1980年に設立されて以来、現在までに日本・チリの企業を合わせ70社以上の会員を擁し、さらに日本政府機関、学術機関も参加するチリの日系社会において影響力のある大きな非営利団体です。

この度日智商工会議所長中村氏の依頼により7月14日椿教授が講演を行いました。1980年代から続くラテンアメリカにおける本学の医療技術支援の紹介に加え、大腸癌に関する講義も行い、参加者との活発な討論が行われました。



講演の様子



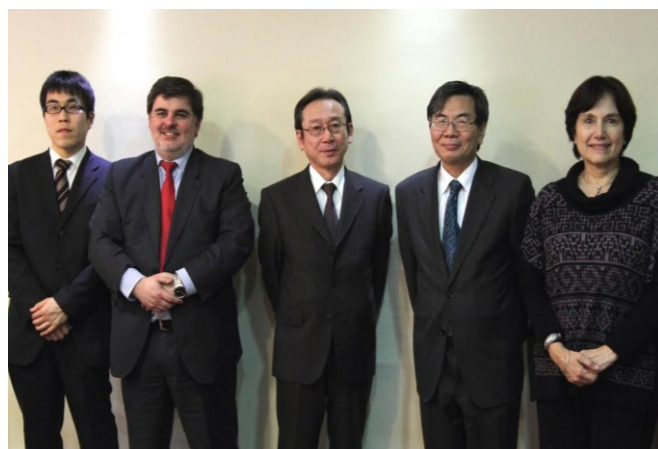
講演終了後、日智商工会議所長中村氏より記念品贈呈

チリ保健大臣表敬訪問

今年1月のチリ保健大臣交代に伴い、在チリ日本大使館の要請により8月26日、カステージョ保健大臣への表敬訪問を行いました。

日本大使館より二階大使、山口書記官、JICAより小林所長代理、LACRCからは椿教授、小田柿助教、CLCよりロペス医師、サン・ボルハ病院からエステラ医師が参加しました。椿教授から本学における1980年代から現在に至るまでのチリへの医療協力の歴史、PRENECにおけるLACRCの具体的な活動及び成果に関して説明が行われました。

保健大臣は本学の活動に対する感謝の意を表明されました。



左より小田柿助教、ブラウズ副大臣、椿教授、二階大使、カステージョ保健大臣

ラ・セレナにて国際学会及び講習会開催

昨年も開催された北カリフォルニア大学主催のPRENEC講習会が今回は第1回消化器国際学会として開催され、海外招聘者としてアメリカ合衆国のJohns Hopkins Hospitalの医師らと共にLACRCスタッフが参加しました。

椿教授は「結腸・直腸癌における日本の標準外科治療」、小田柿助教は「大腸内視鏡診断」に関する講演を行いました。



左より椿教授、ハーベルレ北カリフォルニア大学医学部長、プレスキー医師



記念品贈呈の様子

エクアドルとの第4回国際シンポジウム

2012年に本学とエクアドル政府保健省の間において、大腸癌検診プロジェクト協力に関する覚書を締結しており、拠点病院であるキト・国立パブロ・アルトゥロ・スアレス病院において大腸癌検診プロジェクトが進められています。また本学は覚書に基づいて年に1回、エクアドル保健省と共催で消化管に関するシンポジウムを開催しております。9月15日には第4回のシンポジウムが行われました。今回初めての試みとしてテレビ会議システムを使用して椿教授、小田柿助教が講演を行いました。エクアドルの多くの参加者との活発な討論が行われました。



椿教授とシンポジウム参加者(画面内)



小田柿助教による講演の様子

内視鏡講習会

8月26日から3日間にわたり南米の医師を対象とした内視鏡ワークショップがCLC主催のもと開催され、LACRCより椿教授、小田柿助教が演者として招かれました。ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、ペルー、ボリビアから研修者が参加しました。

初日は椿教授より「早期大腸癌スクリーニング」、小田柿助教より「上部消化管内視鏡の注意点」の講義、翌日はシミュレーターを用いた技術指導が行われ、参加者は熱心に取り組んでいました。今後もこのような活動を通して南米の医師への指導を行っていききたいと思います。



内視鏡講習会の様子



研修者とともに記念撮影

チリ大学附属病院にて内視鏡実演

9月15日に椿教授、小田柿助教がチリ大学附属病院にて、内視鏡の実演を行いました。当日は病院内の多くの医師が見学につめかけました。



内視鏡実演の様子



チリ大学附属病院前にて

Staff

昨年10月に着任されて以来、多くのチリ人医師への大腸内視鏡技術指導に加え、チリ拠点の体制の整備や、JDP(ジョイント・ディグリー・プログラム)の開始に向けた調整や交渉に御尽力いただきました椿昌裕教授が任期満了にて2015年10月離任されることになりました。

離任挨拶

椿 昌裕 東京医科歯科大学チリ拠点 特任教授

昨年9月26日着任から1年間の任期終了に当たり、ご挨拶させていただきます。

私は前回派遣時(1994年1月～12月)には外科医として、今回は大腸内視鏡指導を主体に活動して参りました。指導に於いては日本での経験を活かし、可能な限り研修生に内視鏡操作をさせるよう心がけ、体位変換や挿入方向を口頭で指示しました。任期中に指導したPRENEC研修生は勿論、サン・ボルハ病院研修生らも3ヶ月間の研修期間終了時には、簡単な症例はほぼ10分以内で全大腸内視鏡検査を行えるようになり、ある程度の成果を達成しつつあると実感しております。

また伊藤先生、河内先生、岡田先生のご尽力により3編の論文が完成し、2編は既にacceptされ、私も本年7月バルセロナで開催された17th World Congress of Gastrointestinal CancerでPRENECの成績を発表する機会を得、本プロジェクトは世界に認知されつつあります。

私は外科医、特に直腸癌に対する自律神経温存手術の適応と成績をテーマに研鑽して参りましたので、国内・国際学会で発表して来たデータを元に、サンチャゴを始めとした各都市やエクアドルで講演を行う機会にも恵まれました。講演終了後、開腹手術に於ける側方郭清の手技や自律神経温存手術術式分類、大腸癌取り扱い規約(リンパ節分類方法)などに大変興味を示すチリ若手外科医や学生らと会談しますと、日本人の特性(患者因子を含めて)を活かした手術術式・手技を絶やす事無く後世に継承する努力を、帰国後も継続すべきであると再認識しております。

2016年4月からは日本とチリとの長い交流の歴史を経て、本学

とチリ大学間でのJoint Degree Program(JDP)が新たに開始されます。チリ拠点設置以来、8名の医師、1名の研究員がチリ国内外で様々な活動を行って来ました。それぞれの活動がJDPの成功に役立つ事と確信しております。

最後に公私ともに私を支えて下さった、河内先生、岡田先生、小田柿先生、小林研究員、ハイメさん、早川さん、山中さん、多数のチリ人友人達、また2度にわたるチリ赴任を快諾し同行してくれた妻に、心から感謝し離任の挨拶と致します。



送別会にて

編集後記

チリに到着してからというもの常に人々の温かさを感じており、マイペースではありますが徐々に慣れ、チリ生活を満喫しています。また日本でもニュースになっていた9月16日のチリにおける地震ですが、大きな揺れにも関わらず幸いサンチャゴでは甚大な被害もなく通常どおりの生活しております。9月から11月までの短い研修ではありますが、拠点の一員として情報を提供してまいります。

(学務部学務企画課ジョイント・ディグリー係 山中結衣)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 19, September 2015

[発行日] 2015年9月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp